第17回
「いつもありがとう」
作文コンクール入賞作品集
2023

〈選者〉あさのあつこ／森田正光／小島奈津子／山﨑正毅／清田 哲

シナネンホールディングスグループのこと知っているかな？

皆さんの身近なところで活躍しています！

「いつもありがとう」作文コンクールを主催しているシナネンホールディングスグループのこと、みなさんはどんな会社か知っていますか？
実は、みなさんの住まいや暮らしのなかで役立っていたり、社会を支えたりしています。その製品や事業について紹介します。

「いつもありがとう」作文コンクール主催企業

シナネンホールディングスグループ

シナネンホールディングス　ミライフ西日本　ミライフ東日本
日高都市ガス　シナネン　シナネンサイクル　シナネンモビリティPLUS
シナネンエコワーク　シナネンゼオミック　ミノス　シナネンアクシア
シナネンファシリティーズ

シナネンホールディングス株式会社
本社：東京都港区三田三丁目5番27号 住友不動産三田ツインビル西館6階

SINANEN

ありがとう作文　検索

第17回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集（2023）　もくじ

先生方のお言葉 ……3
あさの あつこ（作家）
森田 正光（気象予報士）
小島 奈津子（フリーアナウンサー）
山崎 正毅（シナネンホールディングス株式会社）
清田 哲（朝日小学生新聞）

最優秀賞
にぎやかな家族　能美 にな ……4

シナネン賞
「ありがとう」をおしえあおうね　坂口 凛 ……6

ミライフ賞
私の母　末吉 優 ……8

朝日小学生新聞賞
スーパーひいばあちゃん　九十八歳
～最終章　旅立ち～　長尾 いずみ ……10

優秀賞
〈低学年の部3編〉
妹はせん国時だいのひめ?!　小松 丈紘 ……12
ありがとうの言葉はつしや三秒前　佐藤 由依 ……14
ぼくの弟、お兄ちゃん　山本 憲政 ……16

〈高学年の部3編〉
ぼくの特等席　中村 友馬 ……18
「お金はありがたい」　大橋 宥生 ……20
五月晴れのヒーロー　安田 彩乃 ……22

団体賞（5団体）
【福島県】矢吹町立三神小学校
【茨城県】結城市立江川北小学校
【愛知県】扶桑町立扶桑東小学校
【広島県】福山市立金江小学校
【福岡県】志免町立志免中央小学校

主催：シナネンホールディングスグループ
　　朝日学生新聞社
後援：文部科学省　朝日新聞社
●応募総数九、二三五作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさの あつこ【作家】

今回も読みながら、何度も何度も感心しました。学年を問わず、しっかりした文章、自分のまわりの人々やできごとを見つめる視点の確かさ。さらに、〝ありがとう〟という言葉の深さや広がりをちゃんとつかんでいく力には、もう、こうさんです。

わたし自身が〝ありがとう〟を適当につかっていたなあと、反省しています。人間っていいなあとも、しみじみ思ってしまいました。それほど、読み手の心に届く作文ばかりでした。

森田 正光【気象予報士】

子どもの感性は時代を反映しているのか、今回はユーモアのある作品に秀作が多かったように思いました。

世界は必ずしも明るいことばかりではありませんが、それだからこそ、子ども達の素直な日常にホッコリし、共感できました。

「子を持って知る親の恩」という言葉がありますが、この作文を読んだお父さんやお母さんは、「子を持って知る子の恩」と感じたのではないでしょうか。「ありがとう」は、言われた側もとても幸せになる言葉です。

今回、応募作品が少し減りましたが、これは子どもの活字離れという要因もあるのでしょう。

しかし逆に、活字で届ける「ありがとう」の価値はむしろ上がっていくのではと感じました。

小島 奈津子【フリーアナウンサー】

皆さんの作品をひとつひとつ楽しく読ませていただき、大人になって忘れてしまっていた自由で豊かな文章表現に、読んでいるこちらも心豊かになっていく実感がありました。

今年は読み進めていくうちに涙があふれる作品や、自分の悩みや葛藤としっかり向き合い成長していく作品など、小学生とは思えない表現力に驚かされました。

山崎 正毅【シナネンホールディングス株式会社】

日常の何気ない行動に対して、子ども達は我々が思っている以上の感受性を持って反応し、家族への愛情と感謝を感じているということを、心温まる作品を通じて感じました。常日頃から自分自身に関わる人への感謝の気持ちを持つことの大切さを改めて教えていただいた、そんな気持ちになります。

毎年、全国から本当に素敵な言葉の贈りものをいただいていると思っております。

私からも皆さんに「ありがとう」の気持ちを贈りたいと思います。

清田 哲【朝日小学生新聞】

作品を通して、今回もたくさんの「ありがとう」と出会うことができました。応募された数だけ「ありがとう」がありました。身近にいる家族だけでなく、「お金」や「ラジオ体操」など物をテーマにした作品も集まりました。みなさんのありがとうに対する視点がどんどん広がっているように感じました。

みなさんの見つけた「ありがとう」をいつまでも忘れないで大切にしてください。

（順不同　敬称略）

最優秀賞

にぎやかな家族

福岡県　明治学園小学校 四年
能美 にな

「二人だとおうちの中も静かでしょう。」
「ご兄弟は？一人っ子はさみしいね。」
母と一緒に出かけた時、時折言われる言葉だ。母は困った顔であいまいに返事をする。我が家は母と私の二人家族。私は一人っ子。兄弟や姉妹のいる人のことは正直うらやましい。兄弟のいる友達のように、姉とのケンカも弟のぐちも私には経験できないからだ。しかし果たして、我が家は「静かな」家庭で、一人っ子の私は「さみしい」のか。考えてみることにした。
兄弟がいたらどんな感じだろう。兄や姉には勉強を習う。おさがりの服ももらえるかもしれない。朝は一緒に学校に行くし、ちょっとしたいたずらも教えてもらう。ゲームで勝てず、くやしい思いもするかな。弟や妹がいたらどんな生活だろう。きっと私の後ろをついてくる。少しうっとうしい気もするけれど、お姉ちゃんと言いながら追いかけてくるのはかわいいだろうな。歌や勉強も教えてあげたいし、夜は一緒のベッドでねるんだ。絵本を読んであげるのもいい。誕生日のケーキも何度も食べられる。うん、たしかに兄弟や姉妹がいる生活はとても楽しそうだ。

では今はどうだろう。母は仕事をしている。家の中のことを切りもりするのも母だ。もちろん家事は完ぺきではない。電車で一駅のところに住む祖母にも協力してもらいながら、母と私は二人で生活している。朝、母は遠回りになってでも、私がバスに乗るまで見送ってから仕事に行く。学校から帰った私は宿題をする。わからないところは帰宅した母が菜ばし片手に説明。ご飯の前には二人でチョコレートを、誰も見ていないのになぜかこっそり口に入れて、にやり。夕食後にはゲームだ。オセロやトランプ、テレビゲームのこともある。母は強い。そのうえ一切手加減しない。負けてばかりだった私だが、最近は歴戦のかいあってどのゲームもほぼ互角だ。夜は私の時間に合わせて母も一緒にベッドに入り、私が作った物語をきいてくれる。そういえば前に私がお出かけで着ていたワンピースは母のおさがりだ。考えてみると、想像してみた兄弟姉妹がいる生活と同じくらい、今の母と二人の生活も楽しい。話題にあふれる家の中は、静かとは程遠い。兄弟姉妹はもちろんうらやましいが、意外なほど、一人っ子でさみしさを感じたことはないことに気づいた。
私は知っている。母が私に教えられるよう、こっそりと私の教科書で勉強していることを。私のそばでできない家事は予め終わらせていることを。忙しい中で工夫して作る私との時間の中で母は私の兄に、姉に、妹に、そして弟に大変身しているのだ。今度誰かに言われたら、母が困った顔をする前に私が答えよう。
「私は、一人っ子です。我が家は、とても楽しくてにぎやかな、二人家族です。」

評価のポイント
ふとした言葉をきっかけに自分の家族と向き合う姿が好印象です。「我が家は、とても楽しくてにぎやかな、二人家族です」と元気よく答える締めくくりも素敵です。

シナネン賞

「ありがとう」をおしえあおうね

鹿児島県　神村学園初等部　一年
坂口　凛

　これまで、たくさんはいていたくつしたが、やぶれてしまいました。そのくつしたを、ママはなにもいわずに、ぽいっとごみばこにすてました。「あれ、なにもいわないの。」と、わたしはおもいました。だから、
「ママ、ありがとうって、いってすてないと、くつしたがかなしむよ。おせわになったでしょう。」
と、わたしはママにいいました。わたしのことばをきいて、ママは、めをまんまるにおおきくして、びっくりしていました。
「りんちゃん、そうだね。おせわになったもんね。」
ママは、そういいながら、びっくりのまんまるめを、にっこりのめにかえました。
「えらいね。そんなこと、だれにおしえてもらったの、すてきだね。」
と、わたしをほめてくれました。
「りんちゃん、おしえてくれてありがとう。」
　わたしは、ほめられるとも、おれいをいわれるとも、おもっていなかったから、びっくりしました。きっとわたしのめも、まんまるのびっくりめに、なっていたとおもいます。でも、ほめてもらえて、こころがふわふわになりました。
「ものをすてるときにおれいをいうこと、だれにおしえてもらったのかな。」と、わたしは、かんがえてみました。がっこうのせんせいかな、おともだちかな、いっぱいかんがえました。でも、おもいつきませんでした。「ありがとう。」を、しぜんにいえたんだと、わたしは、きがつきました。なんだかおねえさんになったようです。「ありがとうがいえるってすてきだな。」と、おもいました。
　つぎに、「ありがとうって、だれにおしえてもらったのかな。」と、かんがえてみました。そしたら、すぐにわかりました。
「だれかに、なにかをしてもらったら、ありがとうって、いおうね。」
と、わたしがちいさいときから、ママがなんかいも、おしえてくれていたからです。「ママがわたしに、ありがとうのきもちをおしえてくれたんだ。」と、きがつきました。
　でも、こんかいは、わたしがママに、「ありがとう。」のたいせつさをおしえてあげることができました。
　ママ、わたしに「ありがとう。」を、おしえてくれてありがとう。わたしも、ママに「ありがとう。」をおしえてあげられて、うれしかったよ。これからも、いっしょに、たくさん「ありがとう。」をおしえあおうね。

評価のポイント
「ありがとう」の大切さを親子で教えあう姿に考えさせられました。大人子ども関わらず多くの人に読んでほしい作品です。

ミライフ賞

私の母

鹿児島県　大崎町立野方小学校　六年
末吉　優

「もう、何で私がこんなことしなくちゃいけないんだろう。」

私の母はフィリピン人だ。だから日本語があまりうまくない。会話はできるが、読んだり書いたりするのは苦手である。仕事を休むときは私がメールを打って送る。「仕方ない。」とは分かっていても、面倒くさくていらいらしてしまう。学校からの手紙も、漢字が多くて読めないので、地域の支援員の方に来てもらって読んでもらう。提出物も、それからなので、ぎりぎりになることが多い。学校で、「優さんのところはまだ。」と聞かれると、どきっとして「まだです。」と小さく答える。「私のせいじゃないのに。」と、もやもやした気持ちになる。そして、同時にそんな気持ちになってしまう自分がいやだった。母は女手ひとつで私たち兄弟を育ててくれている。仕事が大変で体がきついことも何となく分かっている。なのに優しい言葉もかけられない私―。

今年の夏は、そんな母がフィリピンに帰ることになった。フィリピンに住む祖父の体調が悪く、手術をすることになったからだ。

母と別れの日。さみしい気持ちもあったが「一ヶ月なんてすぐだろう。お兄ちゃんも来てくれるから大丈夫。」と、軽く考えていた。母がフィリピンに行っている間は、自衛隊に勤めている兄が帰ってきてくれることになっていたのだ。しかし、実際の生活が始まると、私の予想とは大きくちがうものだった。ご飯作りや皿洗い、そうじに洗たくと、二人で分担したが、大変で、母がこんなにも多くのことをしてくれていたのだと改めて気がついた。仕事で疲れているはずなのに、母はいつもたくさんの家事をこなし、私の話も聞いてくれていたのだ。うれしいことがあったときには、一緒になって喜んでくれ、いやなことがあったときは、私以上におこったり、くやしがったりしてくれた。友達との関係になやんだときは、一生けん命考えてアドバイスをくれる。いつもまっすぐに私のことを見てくれて、私のことを一番に考えてくれる。二十六才で言葉も文化も違うこの日本に来て、つらいことや、大変なこともたくさんあっただろう。なのに「つらい」とか「苦しい」とか、ネガティブな言葉を母から聞いたことがない。母はいつもひまわりのような笑顔で私をてらしてくれる。私は、母に申し訳ない気持ちでいっぱいになり、涙があふれてきた。

「優は優のままでいいんだよ。」

私が自信をなくしかけたとき、いつもそばで支え、味方でいてくれたのは母だった。いつもはなかなか言えないけれど、今なら素直な気持ちを伝えられそうな気がする。「いつもありがとう。私はお母さんの子どもに産まれてこれてよかったよ。」と。そして、今度は私が母の話をたくさん聞いてあげたい。早く無事にフィリピンから帰ってこないかなあ。私は、やっぱり母が大好きだ。

評価のポイント

お母様に対するまっすぐな思いに胸を打たれました。文章の表現力も素晴らしく、共感を得やすい作品です。

朝日小学生新聞賞

スーパーひいばあちゃん　九十八歳
～最終章　旅立ち～

埼玉県　さいたま市立大牧小学校　五年
長尾　いずみ

「こちらこそ、こちらこそ」

と、目を閉じたまま、手を合わせるひいばあちゃん。子ども、孫、ひ孫、沢山の家族に見守られ、皆の「ありがとう」の言葉に答えながら、自宅で、静かに穏やかに旅立ちました。最期の最期まで、ひいばあちゃんの心の中には、感謝の気持ちであふれていました。

二年連続、ありがとう作文コンクールで入選したひいばあちゃん。昨年、熱中症になり、回復したものの、徐々に食欲が減少、お散歩もできなくなり、毎日の洗顔も入浴も難しくなって、ねている時間が増えていきました。そのような状況でも、毎晩、お仏壇の前に座り、短縮版の般若心経を唱える事は、続けていました。そして、私達が遊びに行くと、ベッドから体を必死に起こして、手を握りながら、

「よく来てくれたね。ありがとう。」

と、目に涙をためて微笑み迎えてくれました。

戦時中に生まれ育ち、結婚後は、毎日生きるために必死で生活をし、何度も商売に挑戦をしてやっと成功をしたひいばあちゃん。沢山の困難をのりこえられたのは、ひいおじいちゃんと「自分達の大きな家を持つ」という夢を持ち続けていたからとの事。「為せば成る為さねば成らぬ何事も」ひいばあちゃんがよく言っていた言葉の一つです。この思いで夢を実現させたひいばあちゃんの生き方は、とても素晴らしいと思います。私の誇りです。

お葬式の日。お棺の中には、入選したスーパーひいばあちゃんの作文と、皆で心を込めて写経した般若心経、手紙、お花等を入れました。家族の想いがいっぱい詰まった宝物に囲まれたひいばあちゃんは、まるで仏様のようでした。

ひいばあちゃんが亡くなり、大きく変わった事があります。それは、祖母が、毎日、お仏壇の前で般若心経を唱えるようになった事です。その姿を見ながら、私は、

「祖母の次は、お母さん。そして、その次は私へと、受け継がれていくんだ」

と、しみじみ思います。ひいばあちゃんが毎日欠かさずに続けていた事、その想いが、こうしてずっと生き続けていくのです。

三月十八日、私の誕生日。思いがけないプレゼントが届きました。ひいばあちゃんからです。それは、亡くなる少し前に、ひいばあちゃんが、祖母に「渡してほしい」と託していたそうです。本当に最期まで、私達の事を思ってくれていたのだと思うと、胸がじーんと熱くなります。会いたくなります。

ひいばあちゃん。ひいばあちゃんは、私達に色々な事を教えてくれたよ。大切な物を与えてくれたよ。これから、どんなに辛い事があっても、夢を持って、何度も挑戦をして、進んでいくよ。だから、これからもずっと見守っていてね。心の中でお話をしようね。

いっぱい、いっぱいの「ありがとう。」

評価のポイント

「スーパーひいばあちゃん」のお葬式の思い出を「ありがとう」の気持ちで優しく表現しています。情景の描写が上手く、まるで1本のドラマを観ているようでした。

優秀賞〈低学年の部〉

妹はせん国時だいのひめ?!

東京都　文京区立誠之小学校 二年
小松 丈紘

ぼくのいもうと「モモ」はかわいいかおをしているのに、ウンコがアフリカゾウやコビトカバみたいにくさい。そのオムツでねっころがってまったりしているぼくのかおをふみつけてベンチがわりにする。一さいだというのにわんぱくでぼう力てきなときもある、男の子みたいな女の子だ。でもいつもぼくといっしょにあそんでくれるさいあいの友であり、ママやおばあちゃんをめぐるさいだいのてきでもある。

ぼくがすきなせん国じだいの人ぶつでたとえると、ママやおばあちゃんは色白でかわいい「モモ」のことを、織田信長の妹の「お市さま」のように「モモひめ、モモひめ」とかわいがる。でもぼくにとって妹は、ものすごくせん力がつよい「小松ひめ」のようにかんじる。ちょうど名字が小松だからますますそう思う。

「小松ひめ」とは、ぼくが好きなせんごくぶしょうトップ3に入る、本多忠勝のむすめだ。忠勝は五十七せんむきずでたたかったほどつよくて、頭が良く、せんりゃく家のぶしょうだ。それほどすごい男のむすめ「小松ひめ」。ぼくがお父さんと行ったさい玉の「忍城」の水ぜめの時にも男たちにまざってゆうかんにたたかったひめだ。

そんなつよい「小松ひめ」みたいなぼくの妹だけど、やっぱりわが家にいてほしいそんざいである。ごはんをパクパク・モグモグ食べている時のすがたや、いっしょに好きな音楽を聞いてノリノリでおどるすがたは、とってもかわいくて、毎日ずーっといっしょにいたいそんざいだ。

ぼくは今まで一人っ子で、そんなに楽しくない六年間だったけれど、妹が生まれてからはなんだか楽しくなってきた。朝、学校へ行く前にギュ～ッとハグをすると、なんだか一日元気がもらえる。「小松ひめ」みたいな妹よ、ぼくに元気をくれてありがとう。

妹は小さかったのでちゃんと生まれてくるか家ぞく全員ずっと心ぱいしつづけてきた。元気に生まれてきてくれて、ここまで大きくつよくなってくれてありがとう。

「小松ひめ」よ！せっしゃは今日も元気に出陣するぞ!!

優秀賞〈低学年の部〉

ありがとうの言葉はっしゃ三秒前

福岡県　福岡教育大学附属福岡小学校　三年
佐藤　由依

「こんな時はありがとうって言ってほしいな。」
せんたく物を受け取っただけのわたしにお母さんが言った。お母さんがたたんでくれたから、よく考えればそう言った方がいいかもしれない。でも、そんなふうに言われると、その言葉は口から出てこない。
　そういえば、わたしはお母さんにありがとうという言葉を言っているのかを考えたことがなかった。だから、一週間をふりかえってみると、全く言ってないことに気がついた。なんでだろう。わたしは、そんなにいやな子なのかな。弟とお父さん、お母さんの家族みんなはなかがいいから、べつにその言葉を使わなくてもいい気がする。ありがとうを言うことは大切で、もちろんお母さんにもつたえたほうがいいとわかっている。だから、ありがとうを言うように心がけてみた。一日が終わってみると一回も言えてなかった。いつ言えばいいのか分からない。
　ある日、お母さんにかみの毛をみつあみにしてもらった。お母さんにむすんでもらうと、きれいになるからうれしい。
お母さんの

「できたよ。」
という言葉の後に、今が言えるときだとひらめいたけど、のどから声が出てこない。だから、
「うん。」
だけ言った。どうして、こんなに短い言葉が出てこないのだろう。心の奥がもやもやして、少しはずかしいからかもしれない。少しおちこんだ。
　ある日、お茶を飲みにれいぞう庫の前に立つと、ドアに目がくぎづけになった。ドアには、わたしがお母さんに書いた手紙がびっしりと七まいはられていた。そこには、「いつもみんなのためにはたらいてくれてありがとう。」「やさしくしてくれてありがとう。」「がんばってくれてありがとう。」「勉強を教えてくれてありがとう。」「元気をいつももらっているよ。ありがとう。」「わたしたちを見守ってくれてありがとう。」と書いていた。自分の手紙を読みかえすと、ありがとうを書きすぎていておどろいた。わたしは休みの日になると、お母さんによく手紙を書く。つかれた顔のお母さんに読んでよろこんでほしいからだ。どうしてれいぞう庫にはっているのか聞いてみると
「ありがとうって書いてくれる気持ちがうれしいし、すぐに見えて元気が出るからだよ。」と言われた。わたしは、いつの間にか感しゃの気持ちを文字でたくさんつたえていたんだ。ちゃんとつたえていたことに少しほっとした。
　たくさんのありがとうが書けたわたしだから、すぐに言えるようになる気がする。
「お母さんありがとう。」この言葉はもうすぐわたしの口からとび出していくよ。

優秀賞〈低学年の部〉

ぼくの弟、お兄ちゃん

徳島県　徳島市北井上小学校 三年
山本 憲政

ぼくのお兄ちゃんは、みんなのお兄ちゃんと少しちがうところがあります。

弟みたいなお兄ちゃんです。どうしてかと言うと、おふろに入る時、仕上げはぼくがながしてあげます。くつをはく時、たまに右と左をまちがえる時があるので、ぼくが見ていてあげます。お兄ちゃんはフルーツが大すきなので、ママが分けてお皿に入れてくれてもぼくがよそ見をしていたら、こっそりぼくのお皿のフルーツも食べられてしまいます。空手の練習を見に来ても、すぐにあきて、ママがつれて帰ります。みんな、お母さんや、お父さんが見てくれているけれど、そんな時はぼくは一人で練習します。

そんな弟みたいなお兄ちゃんです。お兄ちゃんは、生まれた時からしょうがいがあります。だつ毛しょうと言うびょう気にもなってかみの毛もありません。しゃべることも少ししか出来ません。でも、ぼくが話しているのは分かるので、ぼくはお兄ちゃんと話すことが出来ます。お兄ちゃんの気持ちもぼくだから分かります。兄弟だからです。ママから先に生まれて来たのはお兄ちゃんだけれど、ママはいつも「けんがお兄ちゃんみたいやな。いつもありがとう。」と言ってくれます。でもぼくもお兄ちゃんに、ありがとうと思う時があります。それは、ぼくのおもいにもつを持ってくれたり、ぼくがせきをしていたり、ないているとすぐにせなかをさすってくれます。お兄ちゃんもぼくの気持ちを分かってくれます。ねる時もお兄ちゃんは一人でねられないけれど、そのおかげでぼくもくらくてもこわくありません。そんな時に心の中でありがとうと思っています。けんかもいっぱいするし、友だちと遊んでいるとじゃまもしてくるけれど、ぼくはそんな弟みたいなお兄ちゃんが大すきです。たまに友だちのお兄ちゃんみたいにゲームを教えてもらったり、しゅく題を手つだってもらったりもしたいけれど、ぼくのお兄ちゃんがこうせいでよかったと思っています。ぼくをこうせいのお兄ちゃんみたいな弟に生んでくれて、ママ、ありがとう。こうせい、ぼくのお兄ちゃんになってくれてありがとう。大人になっても、にが手なことは、手つだうよ。ぼくがかなしい時は、いつもみたいにわらわせてね。ありがとう。

優秀賞〈高学年の部〉

ぼくの特等席

宮城県　聖ウルスラ学院英智小学校 四年
中村 友馬

つらい事やいやな事があった時、お母さんにぎゅっとされるとなみだがたくさん出てくる。その場所で「大丈夫、大丈夫」と言われると、どんなことでも大丈夫なのだと思えてくる特別な空間だ。ぼくにとってお母さんの胸はとても温かくて、いつもせんたくのいいにおいがする、ずっといたい大好きな場所だった。だけど、当たり前にいつもそこにあるはずのぼくの特等席が当たり前のことではなくなると知った日から、その場所はまほうの力を失ったかのようで、なみだを止めることもできなくなってしまった。

「お母さんのお胸、病気と一緒に手術してこないといけなくなったの。」

お母さんからこの言葉を聞いた時、ぼくは何を言っているのかさっぱりわからなかった。お母さんの胸に病気が見つかり、手術しないと死んでしまう大変な病気だった。お母さんの命の方がずっと大切なはずなのに、ぼくは自分の宝物をうばわれるような気がして何度もいやだと泣いてお母さんを困らせた。それから手術までの一か月間は、悲しい時やつらい時、うれしい時、そして理由がない時も、お母さんに力いっぱいぎゅっと抱きしめてもらった。

コロナウイルス感染防止のため、入院しているお母さんに会いたくても、家族が病院へ入ることはできなかった。手術が無事に終わった話をおばあちゃんから聞いた時、ぼくはどうしてもお母さんに会いたくなった。ぼくはおじいちゃんにお願いして、毎朝学校へ行く前にすごく早起きをしてお母さんの病院へ車で連れていってもらった。病院の中に入れない代わりにうらの歩道からお母さんの居る六階の病室を見上げると、お母さんは病室の窓から顔を出して、手をふってくれた。すごく遠くて顔なんか見えないのに、お母さんがさみしい顔をしているように思えて、なみだが勝手に出てきた。こんなにさみしいのに、お母さんに抱きしめてもらえないのは苦しかった。だから、ぼくはそんな苦しい気持ちをどこかへ吹き飛ばすように、そしてお母さんがぼくを見て元気になれるように力いっぱい手をふった。二週間後に退院して家に帰ってきたお母さんは、前と何も変わっていないように見えたのに、当たり前にあるはずだったぼくの大切な特等席はぼくが入れないほど小さな空間に見えた。もう、前みたいに両手を大きく広げて力いっぱいぎゅっと抱きしめてもらえない代わりに、今度はぼくがお母さんを力いっぱいぎゅっとした。

いつも温かくて世界にたった一つの、ぼくだけの特等席は失ってしまったかもしれない。けれど、それは今も変わらずにぼくの心の記憶に残っている。ぼくだけの特等席を作ってくれてありがとう。これからは、お母さんが安心できる大切な場所をぼくが準備するからね。

優秀賞〈高学年の部〉

「お金はありがたい」

岡山県　倉敷市立中島小学校　五年
大橋　宥生

お金が欲しい。何としてもお金が欲しい。

僕の夢は、「金持ち」になることだ。どうすれば、お金が稼げるのだろう。どうして、子どもは、働けないのだろうか。そうだ！滋賀のおじいちゃんのお店で働かせてもらおう。僕は、お父さんとお母さんにお願いして、滋賀のおじいちゃんのお店で働かせてもらうことにした。こうして僕は、夏休みの間、岡山県から滋賀県までたった一人で新幹線に乗って行った。

滋賀県のお家についたら、まずは洗濯やお風呂掃除のやり方を伯父さんに教えてもらった。今日から僕が、この家の洗濯と掃除をやると決めた。滋賀のおばあちゃんは、お母さんが子供のころに死んでしまって、おじいちゃんは一人暮らしだから、僕が助けなければいけないからだ。

いよいよ今日から仕事が始まる。絶対に稼いでやる。十一時にはお店に入ってモップがけをして、お客さんの注文をきいたり、配膳をしたりした。そして、食器の洗い物もした。特に大変だったのが注文を正しくきくことだ。間違えないように注文をとっていると、また次から次へと大勢のお客さんが来てあせるからだ。最初は全然なれなくてとっても大変だったけど、二日目ぐらいから、だんだんなれてきて少しきん張が和らいだ。

こうして僕は、滋賀県二日目に、十一歳の誕生日を大忙しで過ごした。いつもだったら、今ごろ家族でケーキをおいしく食べているのだろうなと思った。

僕がお店で働いて、嬉しかった思い出が二つある。ひとつは、よく来るお客さんが、「ぼくよく頑張ってるね。」ってお小遣いをくれたこと。僕は思わず心の中でニヤけた。もう一つは、携帯電話を忘れたお客さんを追いかけて、「これ忘れましたよ。」って言った時、すごく感謝されたこと。

働いていると色々なことがあった。

滋賀県に来てから仕事を始めると、とっても大変でたくさんの苦労をした。そして、僕は思った。「お金を稼ぐことはとっても大変なことなんだなあ。」と初めて気が付いた。だから、毎日働いてくれているお父さんやお母さんに感謝しないとなと思った。

8月に入って、お母さんとお兄ちゃん達が滋賀に来た。その時、僕は正直とても安心した。僕の家に帰りたいという気持ちがいっきに湧いてきた。

最後の日、僕は遂におじいちゃんからお金を貰った。初めて自分で稼いだお金。「働いてよかったあ！」と心から思った。

これから僕は、お金を大切に使い、使いどころをちゃんと考えたいと思う。毎日のご飯も、お金が動いているのだと感謝して生活していきたい。

お金よありがとう。そして、お父さんお母さん働いてくれて本当にいつもありがとう。

優秀賞　〈高学年の部〉

五月晴れのヒーロー

福岡県　敬愛小学校　五年
安田　彩乃

私の父は、物静かで優しい。そして父の笑顔は、雲の晴れ間にのぞく太陽のようだ。家族を包むその光は、やわらかくて温かい。いつもはのんびりしているけれど、私が困った顔をしていると、雲をふき飛ばす勢いで飛んできて、話を聞いてくれる。難しい宿題を前にして、顔がくもった兄を見ると、霧を晴らすように陽気に歌い出して、家族を笑顔にする。父には、「五月晴れ」という言葉がぴったりだ。私は父の笑顔を見ていると、どんなに不安な時でも、たちまち楽しい気分になる。でもこんなに明るい父でも、一度だけ、くもり空を晴らすのに手こずったことがある。それは母が初めて入院した時のことだ。

私の母は体が弱くて、時々入院する。最初に入院したのは、私が一年生の時だった。母が入院すると知った時、私は驚きと悲しみで、声も出せなかった。いつもは元気な兄も、この時ばかりはだまっていた。家の中にしのび寄る黒い雲を感じて、なみだがポロポロ流れた。もし母が帰って来られなかったらどうしよう。明日から三人だけで、どうやって過ごしたらいいだろう。私の心が不安でいっぱいになったその時、父が明るく言った。

「明日から、お父さんがお母さんになる。」

私も兄も、びっくりして父を見た。父は、親指をぐっと立てて、「まかせて」のポーズでにっこり笑っている。父のおどけた笑顔を見て、私も兄も思わずふき出してしまった。さっきまでの不安な雲が、少しずつうすれていく。父の元気な様子を見ていたら、私もがんばれそうな気がしてきた。父が続けて、

「お父さんは努力の達人です。でも、上手にできるかどうかは、誰にも分かりません。」

と言った時は、少し雲行きがあやしくなってきたけれど、それでも父の言葉はたのもしかった。私はこの日の父の笑顔を、ずっと忘れないだろう。

母がいない毎日は、何をするのも時間がかかった。洗たく物をたたむのも一苦労だ。父が上手にたためていない時、兄は不満を言った。私もそんな兄にイライラして、兄妹げんかをしたこともある。その様子を見た父が、

「ごめんごめん。修業が足りなかったね。でも将来、このシワシワのたたみ方が世界中で流行するかもしれないよ。」

と言って笑わせてくれた。父が笑うと、嵐になりそうなピリピリとした空気が、一しゅんで温かくなる。私は、雲間を照らす太陽のような父のことがますます好きになった。

母は今、体調が落ち着いている。家族四人で過ごす毎日が、私はうれしくてたまらない。そして時々、母が入院していた日々を思い出す。どの場面でも中心にいるのは父だ。苦手な家事をがんばりながら、笑顔を絶やさずに励ましてくれた、五月晴れのヒーロー。私はこれからも、家族で過ごす毎日を大切にしていきたい。父への感謝の気持ちを忘れずに。